

【研究ノート】

中国の山岳と宗教見聞記（その一）

（天台山・廬山）

薄井俊二

はじめに

二〇〇五年度より、科学研究費補助金を得て、中国の山岳を
実地調査する機会を得た。そこで、その折の調査の概要と結果
について、簡略な報告をしておくこととする。いずれも初めて
訪ねたものであることから、予備調査的なものにとどまってお
り、内容も旅行記的なものとなった。これを踏まえて、改めて
詳しい実地調査が出来ればと考えている（一）。

I. 天台山初訪

一. 天台山について

（一）山の位置

浙江省台州市天台县。山域は、県の東北部分をほぼしめる。
山域の南麓に国清寺や赤城山があり、そのすぐ南が天台県の県
城（図1）。

（二）概要

最高峰の華頂峰は、標高一一三八^米。晋の孫綽の「遊天台山
賦」に謳われるなど、古くから佳景幽寂の地として知られ、道
士・隠士が多く住し、仏寺道観も多く建てられていた。五七五
年（陳の太建七年）に、智顛（後の天台大師）がここに入山、
彼が隋の晋王（後の煬帝）の尊崇を受けたことなどから天台山
仏教が盛んになり、智顛の没後に国清寺が落成している。最盛
期は、仏寺が七十箇所以上、道観も二桁を数えたようだが、現
在は仏寺九箇所、道観二箇所があるのみ。

二. 見聞記

（一）目的

現在、唐の道士徐靈府の撰になると思われる山岳地理書「天
台山記」の研究を進めている。そこに記されている記事を現地
で確認すること、当該地域の地理的な雰囲気を感じ取ることを
目的として、この山を最初の訪問地として選んだ。

(二) 旅程(単独行) : 二〇〇五年十二月二十三日～二十六日

1. 午前、成田→飛→杭州。午後、杭州→車→天台山(天台山麓泊)
2. 終日、高明寺・智者塔院・方広寺・石梁飛瀑・華頂寺(天台山麓泊)

3. 早朝、赤城山。午前、天台市内。午後、天台市→車→杭州。

杭州歴史博物館、新華書店。(杭州市内泊)

4. 午前、西湖・西泠印社。午後、杭州→飛→成田

(三) アクセス

天台山へは、寧波市寧海から西に進んで華頂峰に到るコース(徐霞客⁽²⁾)や、沿海の台州から始豊溪沿いに遡り天台県城に到るコース(常盤大定⁽³⁾)などがあった。現在は杭州から自動車で南下して天台県城へ到るルートが主である。かつては六時間ほどかかったが、現在は高速道路が整備され、三時間程度である。

天台県城から山麓の国清寺までは直線で約4km程度、国清寺から北に天台山が広がる。

(四) 見聞報告

初日は移動日。成田杭州間の直行便は一日一便。杭州への到着は、現地時間で午後一時半ごろとなり、ここから天台へは高速道路でも三時間はかかるので、国清寺へつくのは夕方となる。このルートを取るならば、本格的な見学は、二日目以降となる。天台県城の北に「天台山門」(写真1)が設けられているが、ここから天台山が始まる。

山門を入れて右に少し行くと「国清寺」に到る(写真2)。

天台山の南麓に当たり、山中を訪れる場合は、ここを経由することになる。隋代以降、天台仏教の中心地であり続け、最澄ら日本の留学僧も数多く訪れた。

国清寺への入り口付近に位置する隋塔の他、古い建築物が数多くあるが、常盤大定の頃よりかなり整備されており、近年になって造営された建物も少なくない。たくさんの若い僧侶が修行に励んでおり、盛んな様子ではあるが、神聖さ神秘性を感じさせるものではなかった。冬の季節で、免ほどもある大きなリスが、「ギー、ギー」とうなり声を上げていた。

国清寺周辺は、山の麓に位置するわけだが、人里のはずれにあり、夜は全くの暗闇となる。少し山に入ったところでも、深山の趣がある(写真3)。

二日目に天台山に入った。旧道は徒歩で上る道だが、それと平行し、時に交差する形で、車道が整備されている(未舗装)。

山道をしばらく登ると、仏隴と呼ばれる地域がある(国清寺から直線で約3km)。天台大師が入山して初めに道場を建てたところである。大師にまつわる伝説のある場所も多くあり、現在では、高明寺(写真4)と真覚寺(写真5)がある。

高明寺は、山を下った谷底にあり、従来は徒歩でしか行けなかったが、ちょうど訪問したときに車道を整備していた。四方を森林に囲まれた静謐な環境にあるが、細い山道しか無かった時代には、訪問するのも、日用品や建築材を運搬するのもさぞや大変だったろうと想像される立地である。このときも、大きな天秤棒をかついだ人夫達が急な山道を上り下りしていた。石

碑群があるとのことだったが、時間の関係で割愛した。

真覚寺は、天台大師の遺体が埋葬されているという「肉身塔」があることから、「智者塔院」とも呼ばれている。国清寺から華頂寺等山中の施設へ向かう場合に必ず通る場所にある。天台大師以外の多くの僧侶の墓もここにあり、最澄や円珍、栄西など、天台山を訪れた日本僧もほとんどここに参っている。見晴らしのいい小高い丘に位置しており、空の広がりを感じられる場所にある。谷の向こうの村落から鶏の鳴き声が聞こえるなど、平穏でのどかな雰囲気にも包まれている。

仏隴から北に直線で約5kmで、石梁鎮という集落に出る。戦前の地図では竜王堂とあるが、唐代に孟簡が歇亭という遊覧施設を設けた場所。ここを西に行けば万年寺、まっすぐ北に進めば石梁飛瀑と方広寺、東へ進めば華頂峰と、山中の重要道路が交わるところに当たる。夏の観光シーズンには訪問客もあり、食堂もあるとのこと、当初はここで昼食の予定であった。しかし店の食材を観察したガイドが、鮮度に問題有りと言えし、素通りすることにした。

石梁鎮から北に直線で4kmほどで、石梁飛瀑に達する。ここには上・中・下の三つの方広寺があったが、現在は中・下の二刹のみを留める。このあたりは小さなホテルや売店などもあり、観光地としてやや開けている。夏は避暑の観光客が数多く訪れるという。私たちもこのホテル（といっても二階建ての小さな宿）の食堂で昼食とした。

石梁飛瀑は映画のロケ地にも使われたという奇勝である。長さ二十餘、幅六十cmあまりの太い石柱が、短い谷に橋のように

かかっており、その下を滝がくぐって三十餘あまり下の滝壺に流れ落ちていく（写真6）。天台山をめぐるには「石橋」に關わる逸話がよく出てくるが、この石梁もそのひとつである。飛瀑の始まりに中方広寺があり、滝壺の先の緩やかな流れのほとりに下方広寺が位置している。周囲には様々な飛瀑があるほか、石刻も数多く残されている。

石梁飛瀑から一旦、石梁鎮方面に戻り、東に転じると華頂峰である（石梁鎮から約5km）。ここには華頂寺という寺院があるほか、王羲之や李白にまつわる伝説の場所等も数多くある。残念ながら天候と時間の関係で、華頂寺を訪れたに留まった。

帰路は、南へ直進せず、西よりのルートを取った。新しい舗装道路が整備されている新道であるが、その沿線の桐柏宮という道觀を訪問するためである（写真7）。この道觀も唐代以来の古いものだが、人工湖の建設により、本来の位置とは異なった場所にあった。また新築されており、山中にあることに間違いはないのだが、神秘性や神聖さはあまり感じられない雰囲気になっていた。

桐柏宮から下山したところが赤城山地域である。この日は車窓から眺めただけであったので、明朝の再訪を期した。

三日目の早朝、赤城山を訪ねた（写真8）。赤い軟岩が層をなしている山で、赤い城のように見えることから赤城山という。天台県を赤城県と称した時代もあり、この地域を特徴づける景観をなしている。山頂には梁妃塔があるほか、山腹から山頂にかけて、道仏の施設が張り付くようにして建造されている。今回は遠望するに留まったが、再訪時には訪れるべきところであ

る。

午後は杭州市内。中国屈指の名勝「西湖」の他、近年のものでも、宋代の街を復元したテーマパーク「宋城」、絲綢博物館・茶葉博物館等、特徴的な文化施設が多くある。時間の関係上、杭州歴史博物館を訪ねるに留まった。歴史のある都市ゆえ、貴重な展示物が数多くあったが、並べ方に難があり、物を売りつけようとする博物館のガイドには閉口した。

四日目は早朝市内を散策し、黄龍洞の麓の公園を見、西湖を遊覧した。

(四) まとめ

総じて天台山の内部は、深い森と溪谷があり、また奥深い山奥に村落が点在したりするなど、静謐で平穏な雰囲気にあった(写真9)。

また国清寺は、天台山の山麓に位置し、山頂・山奥の諸施設や聖なる場所と、地上の世俗世界の境目に位置していることが確認できた。ここは、天台山仏教の中心地の一つと見ていいが、この寺院で完結しているのではなく、背後に広がる天台山塊とそこに点在する様々な宗教施設や宗教的な場所とつながっているものである。僧侶達は、日常生活や外界・世俗世界との交流の場として国清寺を拠点にしつつ、静謐な環境で行われるべき宗教活動については山中の寺院・道場を訪ねて修行に励んだものだろう。

今回は、初回であり予備的な調査に留まったが、再訪の折には、石梁飛瀑等の山中に宿泊し、万年寺跡や華頂峰山頂、赤城

山等の調査を行いたい。

II. 廬山初訪

一. 廬山について

(一) 山の位置

長江中流の江西省九江市。山域は、九江市区・星子県にまたがる。山域の東側には鄱陽湖が広がっている。

(二) 概要

廬山は別名、匡山または匡廬ともいう。山域は南北約二十五km、東西約二十kmに及ぶ。山の上部は海拔千餘あまりのところまで台地上をなしており、現在は牯嶺鎮という街区を形成している。主峰の漢陽峰は海拔一四七四餘。たくさんの峰があり、また、泉や滝、不思議な形をした石などが分布する。夏はさわやかで心地よいので、清朝末期以来、避暑地、療養地として開発された。山域の東側に鄱陽湖が広がっていることもあって霧が多く、訪れる度に異なった景観を見せると言われる。

歴代の詩人、墨客もこの山を訪れており、千五百人にもものぼる詩人が登山したと伝えられている。中でも有名なのは、陶淵明、李白、白居易、蘇軾、郭沫若などで、この地に多くの傑作を残している。清末の外国人宣教師達の教会や、蒋介石、毛沢東、周恩来などの有名政治家が居住した別荘も残されている。

西暦三八一年の東晋の時代に、慧遠法師が廬山に入山し、江州刺史の援助の下に、北側の山麓に東林寺を建てた。いわゆる

廬山の念仏結社のはじまりで、中国浄土教史上エポックメイキングな事柄である。

二. 見聞記

(一) 目的

廬山については、慧遠とその僧俗の弟子達による、様々な文章が残されている。これらを解釈していく上で、現地の雰囲気・環境を知ることが有益であろうと考え、対象地として選んだ。とりわけ、廬山諸道人撰と伝える「遊石門詩並序」に記される「石門澗」は必見であった。

(二) 旅程 (飯泉健司氏と二人で) : 二〇〇六年三月六日〜十日

1. 午前、成田↓飛↓上海(浦東)。午後、上海(虹橋)↓飛↓南昌(南昌市内泊)
2. 午前、南昌市立図書館。午後、廬山北麓の東林寺・西林寺(廬山牯嶺鎮泊)
3. 午前、廬山の錦綉谷。午後、石門澗下り・香炉峯付近(廬山牯嶺鎮泊)
4. 午前、石鐘山。午後、南昌↓飛↓上海(上海市内泊)
5. 午前、上海市内書店・上海博物館。午後、上海↓飛↓成田

(三) アクセス

従来は、長江沿岸の九江から南下して東林寺へ到るルートが中心(徐霞客、常盤大定)。現在は、南昌と九江を結んで廬山

の西側を通る高速道路ができていることから、西麓の通遠で高速を下り、廬山に上るルートが整備されている。

山麓(東林寺)から牯嶺に到るルートとしては、かつては溪流に沿った険しい山道が何本かあったらしい。現在は、西よりの石門澗沿いのもののみが生きており(歩道は整備されている)、他は湮滅している。車で上る道は、通遠から東へ上るものが主流だが、そのまま牯嶺を突き抜けて、東北部へ下りるルートもある。これは毛沢東が自分のために整備させた道であるという。

(三) 見聞記

初日は移動日。成田から上海市の東端にある浦東国際空港へ飛び、車で市内を抜けて西端にある虹橋空港へ行って国内線に乗り継ぐ。市内が混雑し、出発時刻ギリギリの到着であった。南昌空港には十六時頃(現地時間)着。ここから南へ車で約一時間で南昌市内。

二日目は午前に南昌市立図書館を見学。閲覧料が必要(年三十元)であったためか、閑散としている。市内の書店では立ち読み(座り読み)する人がたくさんいたが、そこでは只で読めるからかと納得する。一般開架の図書もお寒いものであった。午後、東林寺へ。東林寺自身(写真10)はかなり観光地化されており、あまり面白くない。しかし、隣接する西林寺(尼寺、写真11)や周辺の農村(写真12)は趣がある。

慧遠が住した東林寺は、「廬山にある」と記されることから、山中にあるという予断を抱いていたが、実際には山麓、しかも

かなり平坦な所に位置していた。背後（北側）に丘を背負ってはいるが、廬山に連なるものではなく、それを越えれば九江市へ到るものである。周辺も平らな農地が広がっており、寺の前を流れる小川も、決して急流ではない。もちろん、慧遠らが活動していた千年以上前と同じ環境ではないだろう。しかし当時原始林が茂る原野だったかもしれないが、奥深い幽遠な山奥であったはずはない。

現在は南昌など西南方面から廬山に向かうコースが主流であるので、東林寺は廬山の「向こう側」にある印象があるが、九江から南下するコースが主であった近代以前は、東林寺は廬山の「入り口」に位置していたことになる。天台山における「国清寺」と同じく、宗教的な場所である山岳の麓にあって、世俗世界と聖なる場所（＝廬山）との境界に位置する、仏教文化センターの役割を担っていたものと思われる。

東林寺から車で二十分程度で、石門澗下流に着く。ここから石門澗上流の鉄船峰が遙かに見える。

三日目は廬山山頂の牯嶺周辺。如琴湖・花径等、観光客向けに最近作られた施設が多い。錦繡谷に入る（写真13）。断崖絶壁に散策路が作られており、奇観・絶景の連続である。平穏なときであれば幽山の静けさを感じられるところであろうが、丁度季節はずれの観光客が押し寄せており、喧噪のただ中であつたのは残念である。錦繡谷の出口付近に仙人洞がある（写真14）。ここも霊妙な雰囲気の中にあるのだろうが、この日は上野動物園のパンダ並であつた。

午後、当初の目的であつた石門澗下り。ここは廬山山頂から

北へ下山するルートのひとつで、現在生きて利用されている唯一のものである（とはいえ公園として整備されている）。途中には滝や奇岩などが相次ぎ（写真15、16）、慧遠はじめ古今の名士名僧に関わるエピソードのある場所もたくさんある。深山の中に分け入っている風情があつた。ただし、約二時間、ひたすら下り続けることになる。「下りても下りても、まだ下がある」という感じで、「この道を再び上ることは無理」となり、麓に車を回してもらふことにした。慧遠らは、東林寺と廬山山頂を、このルートで行き来したものだだろうが、現代人からすればかなりな難路である。

山麓に「龍泉精舎」と題する建物があつた。慧遠が住したところと同じ名前であるが、それに連なるものであるかどうかは不明。

夕方、香炉峰を探したが霧のため見つからず。東林寺周辺を散策したが、農家の墓地などを見つめる（写真17）。こうした墓は、郊外に点在している。

四日目は、牯嶺から東北側に下りる道を取り、鄱陽湖の向こう岸にある石鐘山に行く（写真18）。長江から鄱陽湖に入る水路に位置する岩山で、交通の要衝にある。古来要塞が築かれるなど政治的・軍事的に重要な意味を持っていたが、民国創建時や太平天国の乱にちなむ遺跡などがある。南昌経由で上海に戻る。

五日目は、上海市の書店と博物館。午後の便で成田へ。

（四）まとめ

今回の旅行では、東林寺と廬山の位置関係について一定の見

方を得たことが収穫であった。繰り返し述べていることだが、山の宗教の場合、修行をしたり天啓を得たりする「聖なる空間」である山に関連施設が設けられるわけだが、そうした山中寺院・道観だけでは、宗教施設として十分に機能しないのではないか。山麓の、世俗世界へつながる位置、即ち聖俗の境界にも寺観は作られ、その教団の活動拠点としての役割を果たしていたのではないか。つまり山中寺観と山麓寺観との両方があって、宗教者はそれらを行き来しながら、聖俗双方に関わる活動を展開していたのではないか、という訳である。おぼろげながらに感じていたことを、東林寺の立地を体感することで確かめることができたように思う。

石門澗についても、実地体験をすることで、「遊石門詩並序」の生き生きとした記述をより具体的に理解することにつながったように思われる。

次回、再訪の折には、九江から東林寺への踏破、大天池・小天地等の山頂の遺跡や嘗ては奥の院であった廬山南麓などを調査したい。

注

(1) 今回の(その一)では、二〇〇五年度に実施した、天台と廬山への訪問記とした。二〇〇六年度の五台山と二〇〇七年度の王屋山への訪問については、稿を改めて記す予定である。

(2) 徐霞客(名は宏祖)は明代の旅行家・紀行文作家。中国各地を見聞した記録文『徐霞客遊記』十二巻がある。

(3) 常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』一九四二、竜吟社
(一九七二、国書刊行会影印)

●天台山と廬山関係資料(日本での出版物)

○中国仏教協会・日中友好仏教協会編『中国仏教の旅 第四集』一九八〇、美乃美(天台山・廬山双方を収録)

○陳公余・野本覚成『聖地 天台山』一九九六、佼成出版社

○齋藤忠『中国天台山諸寺院の研究』一九九八、第一書房

* 図1は天台山地域、図2は廬山地域のそれぞれ地形図。いずれも戦前に日本軍が作成(現地作成のもの)を元にしたものとした五万分の一地図。現在中国では、軍事上の問題からか、地形図は一般に公開されていないので、地形を探るにはこうした古い地図に頼らざるを得ない。戦前の中国地形図は、その一部がリプリントされている他、東京大学等に所蔵されているものがある。

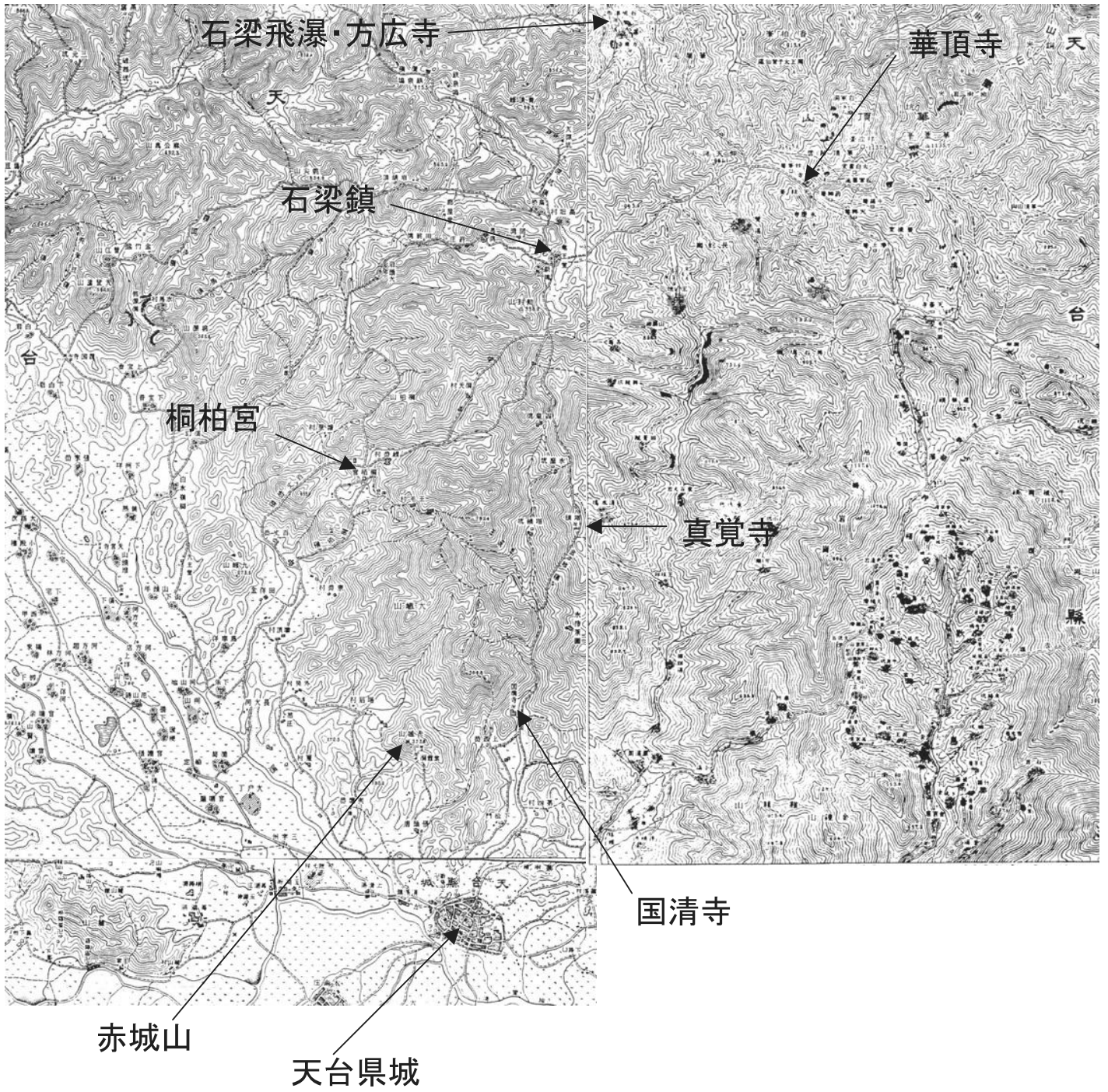


图1 天台山地形图

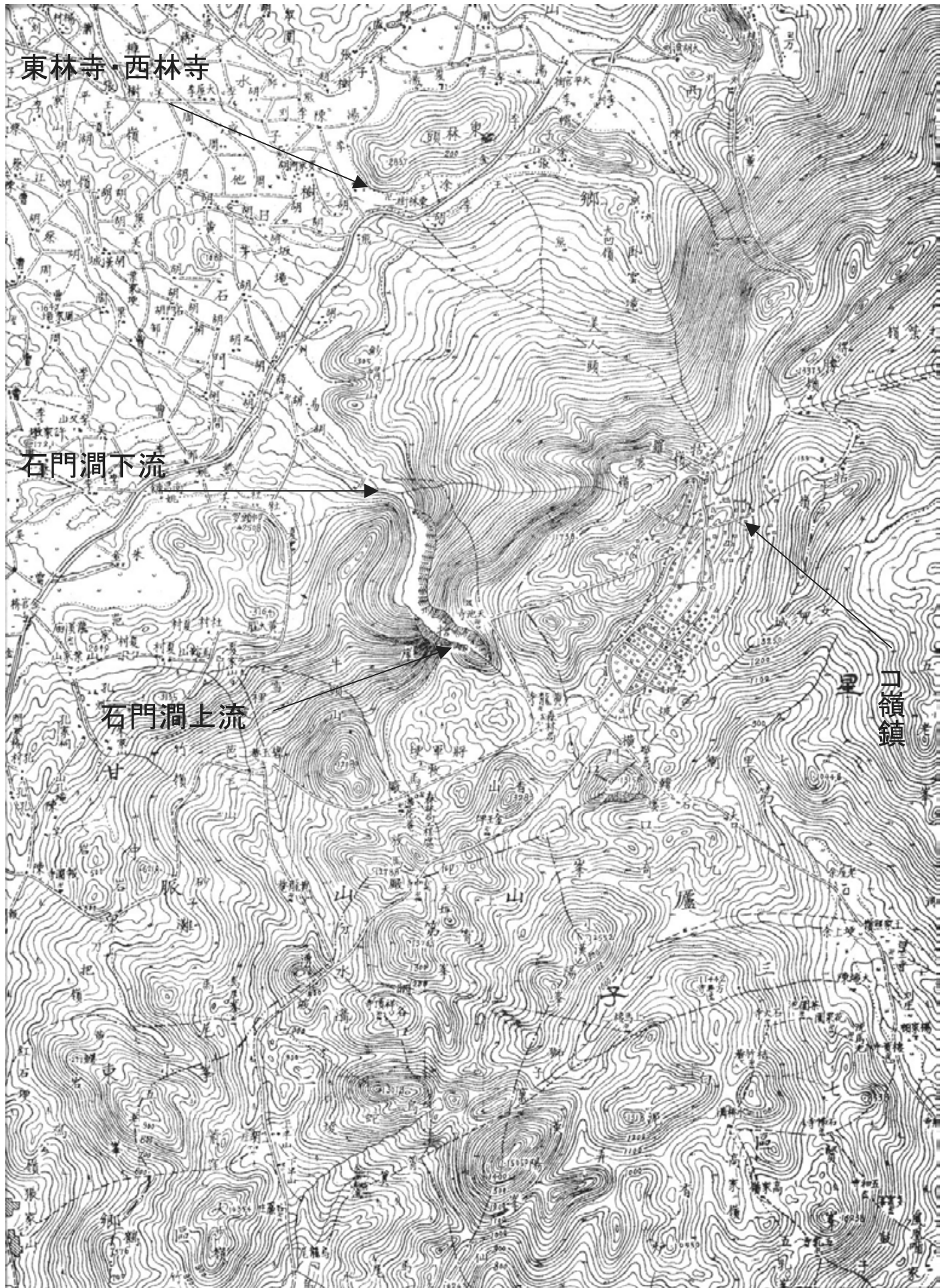


图2 廬山地形图



写真1 天台山門



写真2 国清寺



写真3 国清寺の奥



写真4 高明寺



写真5 真觉寺



写真6 石梁飛瀑と中方広寺



写真7
桐柏觀



写真8
赤城山



写真9
天台山中



写真10 東林寺、背後に塔



写真11 西林寺、優美な塔



写真12 周辺の農地 遠望は東林寺



写真13
錦綉谷



写真14
仙人洞



写真15
石門澗の滝



写真16
石門澗



写真17
農家の墓



写真18
石鐘山